

(別紙)

花にまつわる「ちょっといい話」の入賞作品集

平成20年2月1日

財団法人日本花普及センター

公募、審査の経過

募集期間： 平成19年11月1日(木)～平成20年1月8日(火)

募集告知方法： 全国の花屋、全国の市場、花緑イベントなどでの応募はがき配布、公募雑誌、
公募webサイトでの掲載、当センターのホームページでの掲載 等

最終選考： 平成20年1月22日(火)に作品審査委員会の開催

応募者の状況

応募者の所在地： 47都道府県から応募がありました。

性別： 男性30.3% 女性69.2%

年齢： 各年代から幅広く応募がありました。

応募手段： はがき44.4% FAX 27.1% Email 28.5%

年齢区分	人数	比率
19歳以下	36	3.5%
20～29歳	159	15.5%
30～39歳	260	25.3%
40～49歳	191	18.6%
50～59歳	186	18.1%
60～69歳	116	11.3%
70～79歳	55	5.4%
80歳以上	10	1.0%
不明	13	1.3%
計	1,026	

花にまつわる「ちょっといい話」の入賞者リスト

連番	入賞区分	都道府県	入賞者氏名
1	大賞	千葉県	新田さおり
1	優秀賞	宮城県	大久和子
2	優秀賞	栃木県	古菅由理
3	優秀賞	栃木県	田中由紀子
4	優秀賞	千葉県	杉山佳代
5	優秀賞	千葉県	渡会克男
6	優秀賞	山梨県	今井直子
7	優秀賞	新潟県	野口由紀
8	優秀賞	大阪府	井上和也
9	優秀賞	高知県	奥村恵利
10	優秀賞	福岡県	三浦美恵子
1	佳作	岩手県	福島浩子
2	佳作	群馬県	中野明代
3	佳作	東京都	中村好子
4	佳作	千葉県	駒澤 男
5	佳作	千葉県	下田久人
6	佳作	岐阜県	山田弘美
7	佳作	滋賀県	高橋みなみ
8	佳作	京都府	清水あゆ美
9	佳作	広島県	牛尾拓治
10	佳作	山口県	小田千代
11	佳作	福岡県	松本春彦

大賞 1作品

千葉県 新田さおり

毎年、誕生日の時に父から送られて来る年齢と同じ本数の赤い薔薇。
彼氏は代われど、親は代わらず。
親からの愛情は永久に不滅なんです。
いつでもわたしの心にみずみずしく咲く薔薇の花。
わたしがドライフラワーになる前には安心させるからねっ！

優秀賞 全10作品

宮城県 大久和子 「天国から届いた花束」

夫が亡くなり2週間。2人で祝うはずだった結婚記念日を私は独りで迎えた。空っぽの椅子を前にグラスを2つ並べる私に、宅配便の花束が届いたのは、その時。差出人を見て、涙が溢れた。配達日を指定して、こっそり準備してきてくれたのだろう。贈り主は夫だった。込み上げる寂しさに、私は優しくった夫を少しだけ恨んだ。
天国から届いたのは、青い小さな忘れな草の花束。英語名『Forget me not』・・・私を忘れないで。

栃木県 古菅由理 「とっておきのサプライズ」

昔、私がバイトしていた花屋に、「結婚記念日に、妻に贈る花束がほしい。夕方、自宅の勝手口に届けてください」と注文した中年男性がいた。
何故、勝手口に？理由は、次に続く言葉で理解できた。
「自分で渡すのは照れ臭いので、夕方、台所にいる妻に渡してほしい」とのこと。
勝手口で驚く奥様に事情を説明する私。
花束を受け取った奥様の表情は、花束に負けないほどのステキな笑顔だった。

栃木県 田中由紀子

「いい匂い。何て香水？」
若い頃から化粧っ気なしで、その日もジャージ姿で飛んで来た私に、知人の言葉は思いがけなかった。
え？ あ！ 花の匂い -
うちは農家で、さっきまでストックの花を束ねる作業をしていた。一日中。
花の香りが、服に移ったんだ -
うれしくて、すこし誇らしくて、ちょっとしあわせな瞬間だった。

千葉県 杉山佳代 「初夏のモッコウバラ」

「あっ。モッコウバラだ！」そう娘が嬉しそうに叫んだのは都内の住宅地であった。

横浜の私の実家に行く度に、庭で季節の花々を見ては、いつも母に花の名前を聞いてくるのだ。そのモッコウバラがあったお宅も初老のご婦人が庭先に出ている、こんな小さい子が珍しい花の名前を知っていて、と一瞬驚きながらも微笑んで下さった。こちらもニコッとちょっと頭を下げる。知らない場所で花のお陰でふっと和んだ気持ちのいい日だった。

千葉県 渡会克男 「元気か！」

教室のドアを開けた途端、爆竹が鳴り響いた。

「バカヤロウ！」と怒鳴ってから、涙を見られぬために君達に背を向けた。黒板には「待ってました。退院おめでとう」の大書。

卒業式の日にもらった蘭、丹精込めて十数年、今年も見事に咲いてるゾ！

わかったか、悪ガキども！

山梨県 今井直子 「1本のバラから」

失恋したばかりの私に1本のバラを持って、「付き合ってください」という彼。2回目のデートで2本、3回目のデートで3本。間違う事なく逢った回数分のバラを、手渡す彼。思わず笑った。バラの数が増える毎にその香りに私の心は癒され彼の思いがその花の数と重なる様に、伝わった。私は彼を少しずつ愛するようになっていった。そして彼との結婚式で丁度「100本のバラ」を受け取り式場中にバラの香りと幸せが、溢れた。

新潟県 野口由紀 「魔法の花」

初めてクラスを持った1年目の授業参観のこと。上手く授業が進むか、何度も指導案を見ては、心の中でリハーサル。当日、ちょっと早めに教室をのぞいてみると、花が…。

「私の魔法」として隣のクラスのベテラン先生が飾ってくれていました。授業参観終了後、お礼に行くと、「花があるないでは、生徒の心のゆとりが全然違うのよ。」と、虎の巻を伝授。

初めての授業参観は、大成功。私もいつか、気配りができるような教師を目指したいです。

大阪府 井上和也 「一輪のバラ」

高校の卒業式も終わり、担任のない私は式の後片づけをしていた。

すると、生徒がどこからともなく交互にバラの花一本だけを持ってくる。

「お世話になりました」とか、「先生お元気で」とか殊勝な言葉を述べて立ち去っていく。その一本ずつが、いつしか40本のバラの花束になった。

そうか。2年前高で担当した40名の生徒達が私に気を遣ってくれたのだ。

静かになった職員室でバラの花束を見つめていると、じーんと目頭が熱くなった。

高知県 奥村恵利

初デートの時、あなたがくれた白いカラーの花束は、今も私の心の宝塚。
シャイなあなたが勇気を出して贈ってくれたその花の意味を忘れない女でいたい。
<美しい人>
今日もその花言葉は元気をくれる。
前向きに、堂々と、凜とした姿勢で生きていく事を私に思い出させてくれる。

福岡県 三浦美恵子 「その花言葉は」

「えっ？ お父さん、それどうしたの？」
シックな色合いの花束を手に持った夫の姿を見て、二人の息子が目を丸くした。
「はい、おめでとう。今日はお母さんの誕生日だから」
私のイメージだったからと、赤紫色のダリアを選んでくれた夫は、たぶんその花言葉を知らない。
『華麗・優雅』
私はドキドキして、小さな声でありがとうとささやいた。

佳作 全11作品

岩手県 福島浩子 「お花でかわいいあいさつ」

小学校で給食配膳をしている私、時々家に咲いている花を摘んで小学校の玄関に活けている。仕事の合間を見ながら水換えをしていると、一年生の男の子が「先生いつもきれいなお花ありがとう」とペコリと頭を下げた。
私は「どういたしまして！」と言ったものの心の底から嬉しかった。お手入れしていても素通りしていく子が多い。しかも一年生の男の子がそれ以来、花の名前を聞いた話しかけ友達も一緒だったりする。私の方がありがとう！

群馬県 中野明代

今日は結婚記念日。洒落たレストランで「乾杯」なんてやっていた頃が懐かしい。
12年の月日は、カレンダーに書かれた「結婚記念日」の文字を、まるで気にとめることなく通り過ぎていった。お互い様なのは百も承知だが、やはりため息の一つもつきたくなる。
ふと玄関のチャイムが鳴った。モニターにはおっきな花束に埋もれそうなお花屋さんの顔。メッセージカードには「13年目もよろしく」
...一本とられたな。

東京都 中村好子

英国人の上司が帰国することになった。

「じゃ、さようなら。」

「お世話になりました。お元気で。」

私は、パスを見送ると、オフィスの来客用の椅子に深く腰掛けた。

「あっけないなあ。3年も一緒に働いたのに。」

すると、誰かが、オフィスのドアをノックした。

「お届けものです。」

ドアを開けると、そこには、配達人が大きな花束を持って立っていた。

メッセージカードには、「Thank you!」の文字。

今ごろ空を飛んでいる上司からだった。

千葉県 駒澤 男

妻と結婚して3年。「貴方は本当に冷たい」が妻の口癖。8月8日。結婚記念日。僕は花屋でひまわりの花束を買う。何となく恥ずかしさを隠してくれる元気な花を選ぶ。「はいっ」無愛想に手渡す。ありがとうはやはり言えない。ふと妻を見ると涙を流している。「何だよお前」驚き、言葉をかける。「ありがとう」今度は嬉しそうに答える。僕は知った。花束という形に変えることが精一杯な僕だけど。心を伝える大切さを。

千葉県 下田久人

花を贈られる時はいつも少し照れくさい。

会社を辞めた時と舞台公演の主催をし、メンバーから贈られた時の2度。

「電車に乗るんだから目立つよ」と口では言ってもなぜかその照れくささが誇らしい。

『自分がドキドキすること。ヒトをドキドキさせること』

花にはそんなチカラがあったりする。

だから、それ以来、特別なヒトには花を贈っている。

選んでる時がまたドキドキする。

受け取ったあのヒトが、どんな顔をするのか見たくって。

岐阜県 山田弘美

ロマンチックのかけらも無い夫が一度だけ花をくれたことがある。ドライブの帰り突然、「結婚するか」と言って小さな花束を私の胸にグッと押し付けた。黄色いフリーズアだった。職場の先輩に「お前にプロポーズで気の効いたことが言えるはずない。花ぐらい買って行け」と言われたと後で聞いた。あれから25年。花屋の店先で黄色いフリーズアを見掛けると苦虫をつぶしたような夫の顔がちょっと恥らう。その顔が私は好きだ。

滋賀県 高橋みなみ 「ちょっといい話」

今日、ちょっといい事がありました。それは電車のホームでの出来事。荷物をたくさん持ったおばあちゃんに若い男の人が「持ちますよ」と声を掛けていたのです。おばあちゃんはちょっと申し訳なさそうだけどすごく嬉しそう。

声を掛けた男の人もなんだか嬉しそう。見れば男の人の鞆の中にはプレゼントらしき花束が。だから嬉しそうなんだ。自分が嬉しいと人にも優しくなれるんだ。そのプレゼントの花束は今日たくさんの人を幸せにしました。

京都府 清水あゆ美 「あなたをはげましたかっただけ」

主人は、花き農家である。五年前、新しくトライした花壇苗がうまく育たない、と毎日悩み続けたことがあった。そんな主人を見るのが辛くて、よく聴くラジオ番組にリクエストをした。スマップの「世界に一つだけの花」と主人へのエールと。その日も主人が悩んだ顔でいたら、番組で私のそれが読まれた。主人が「これ、おまえ？」と尋ねた。恥ずかしいからごまかした。

「花だって生きているし、あなたも生きている。がんばれ」

広島県 牛尾拓治

定年退職の日、職場の仲間から花束を贈られた。吾亦紅だと言う。定年を迎え妻への感謝の気持を表わしたいと考えていた私は、その花束に私の言葉を添えて妻に渡すことにした。車で帰宅する 30 分足らずの間に「母として子等が恋う君 吾も恋う 妻として人として」と紙に書き、花の名前を説明しながら、子供達の前で妻に渡した。それから 5 年経過した今も、妻はその言葉を書いた紙をハンドバックに入れて持ち歩いている。

山口県 小田千代 「花にまつわるショートストーリー」

女は駅前に小さな花屋を開いていました。男はいつも同じ時間に花 1 輪買って帰りました。

「これを」笑顔で指さし、女は「はい」と笑顔で答えます。

渡す時、かすかに指先がお互いふれました。ただそれだけ。

1 年過ぎた雪のある日、女は思わず尋ねました。「どなたに？」「あなたにずっと渡していました」

そう男は受け取っていたのではなく想いを届けていたのです。

涙をかくす女のその手は花をかばってあかぎれていました。

福岡県 松本春彦 「記念日の父」

定年後、会社人間だった父はなすこともなく日々を過ごしている。ある日、散歩の途中で花屋をみつけたと言って花束を持って帰ってきた。「どうしたの？」と聞くと、「買った」と仏頂面で母に押し付ける様に手渡した。あ然とする母に「いつもすまん」と小さな声で言うなり奥の部屋へ引っ込んだ。母は、うれしそうに花束をかかえて僕に背を向けた。「結婚記念日？」と言う僕の声に大きな伸びで答えをくれた。